

ALL LIVING
BEINGS ARE CREATED EQUAL

徳洲新聞

TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP NEWS

23/MAY 2016 No. 1032



5月23日 月曜日

www.tokushukai.jp

発行：一般社団法人徳洲会
〒102-0083 東京都千代田区麹町3-1-1 麹町311ビル8階
TEL:03-3262-3133
制作：一般社団法人徳洲会 編集室
〒102-0083 東京都千代田区麹町3-1-1 麹町311ビル8階
TEL:03-6272-3687 FAX:03-3263-8125
Email:news@tokushukai.jp

出雲徳洲会病院

多職種が一致団結して “チーム出雲”で対応



ウェブ動画で紹介



田原院長(右)と小林梢リポーター

「どんな場所でも生命だけは平等だ!」

徳洲会グループはインターネット上の動画サイト「YouTube」に、グループ病院の医療への取り組みを紹介する番組を毎月配信。

今回は神話の国・島根県出雲市にある出雲徳洲会病院を訪ねた。この地域は人口約17万5,000人のうち65歳以上の割合が28.6%と、全国平均を上回る高齢化が進んでいる。

このため同院は急性期病棟だけでなく、療養型病棟も併設、さらに介護老人保健施設も院内に開設。訪問看護、訪問リハビリにも力を入れ、患者さんと家族をサポートする体制を敷いている。多職種が連携し“チーム出雲”で患者さんに対応するのが大きな特徴だ。

田原秀樹院長は「さらに地に密着した病院になりたい」と意気込みを語っている。

番組へのアクセスは、徳洲会グループのホームページ(<http://www.tokushukai.or.jp>)のトップ画面にあるバナー「どんな場所でも生命だけは平等だ!」をクリック!



徳洲会のホームページにあるこのバナーをクリックすると、番組にアクセスできる

新庄徳洲会病院

褥瘡防ぐ講演 100回超

八鍬・皮膚・排泄ケア認定看護師



「地域から褥瘡関連死をなくしたい」と資格を取った八鍬副主任

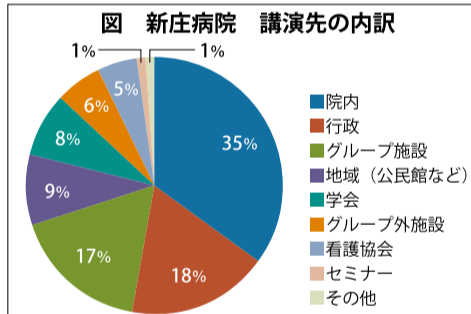
新庄徳洲会病院(山形県)は褥瘡(床ずれ)の予防や重症化阻止を目的とした医療講演に注力している。重症の褥瘡は時に生命に危険を及ぼすが、その重大性はあまり知られておらず、患者さんや家族、介護者らが事態を認識しないまま悪化するケースが少なくない。同院は「褥瘡で命を落とす地域の患者さんを減らしたい」との思いから褥瘡治療のための入院を受け入れるとともに、早期発見と予防に向けた啓発活動を展開。皮膚・排泄ケア認定看護師の八鍬恵美副主任の院内外の累計講演回数は100回を超えている。

新庄病院入院患者さんの褥瘡有病率は6・5(12・9%)と、療養型病床を有する病院の全国平均2・2%(第3回「平成24年度」日本褥瘡学会実態調査委員会報告)に比べかなり多い。その大半が褥瘡治療を目的に他院から転院してきたり、介護施設や自宅から入院してきたりする、もち込み患者さんだ。

褥瘡は皮膚など軟部組織に持続的に圧力が加わることで当該部位の血流が阻害、その部分の組織が壊死した病態。自分で寝返りなど体位変換ができない長期臥床(寝たきり)の患者さんや、低栄養などで皮膚が弱くなっている患者さんに発生しやすい。適切に処置しないと壊死はやがて筋肉や骨にまで達し、壊死組織の細菌が血中に入り込むと敗血症などの感染症を合併、最悪の場合、死に至ることもある。

同院が立地する最上郡(1市7町村)は高齢化率が30・8%(山形県健康福祉部健康長寿推進課「平成26年データ」で見ると、2004年から褥瘡対策に本格着手。当初は院内ケア・予防が中心だったが、もち込み患者さんに重症例が多いことから、八鍬副主任は09年地域の褥瘡対策を目的に皮膚・排泄ケア認定看護師の資格を取得した。

一方、同郡の面積は1804km²と香川県全域の面積(1876km²)に近い広さをもちながら、褥瘡を含めた創傷やストーマ(人工肛門・膀胱)、排泄の管理のスペシャリストである皮膚・排泄ケア認定看護師が2人しかおらず、少ないマンパワーでどう対応するかが地域の課題だ。



八鍬副主任は「もし褥瘡の知識をもつ誰かが、この患者さんの傍にいてチェックしていたら、ここまでひどくならず、60歳代の若さで亡くなることもなかった」と、周知の必要性を痛感。資格取得後は模索しつつも地域の医療・介護関係者を対象に啓発活動を続け、今

や行政や県看護協会などからも定期的に講演依頼が入るまでになった(図)。講演では知識だけでなく、正しいスキンケアやオムツの当て方など実践指導も行う。たとえばドライスキンは皮膚のバリア機能が低下し褥瘡ができやすくなるだけでなく、掻痒感(かゆみ)が生じかきむしることが原因で創傷リスクも高まることなどを伝え、正しい清拭や洗浄、保湿ケアのタイミング、保湿クリームの塗り方などを紹介。

あわせて医療・介護関係者らが褥瘡について困った時に電話やEメールで相談できる「床ずれ110番」を用意。褥瘡のなかには皮膚表面がわずかに発赤している程度でも深部で進行しているDTI(deep tissue injury)などもあり、重症度判断は難しいことから、Eメールで患部の写真を送ってもらうことでアドバイスしやすくなり、有用なツールとなっている。また、より多くの患者さんに対応するため、皮膚・排泄ケアの院内資格「スキンケアアドバイザー」を創設。これは5回の講義受講と4回の試験(ペーパーテストと実技)クリアにより取得可能な資格で、取得すれば認定証とともにバッジを進呈、院内の褥瘡や排泄管理は、このバッジを付けている職員に相談できる仕組みだ。

八鍬副主任は「もし褥瘡の知識をもつ誰かが、この患者さんの傍にいてチェックしていたら、ここまでひどくならず、60歳代の若さで亡くなることもなかった」と、周知の必要性を痛感。資格取得後は模索しつつも地域の医療・介護関係者を対象に啓発活動を続け、今

や行政や県看護協会などからも定期的に講演依頼が入るまでになった(図)。講演では知識だけでなく、正しいスキンケアやオムツの当て方など実践指導も行う。たとえばドライスキンは皮膚のバリア機能が低下し褥瘡ができやすくなるだけでなく、掻痒感(かゆみ)が生じかきむしることが原因で創傷リスクも高まることなどを伝え、正しい清拭や洗浄、保湿ケアのタイミング、保湿クリームの塗り方などを紹介。

あわせて医療・介護関係者らが褥瘡について困った時に電話やEメールで相談できる「床ずれ110番」を用意。褥瘡のなかには皮膚表面がわずかに発赤している程度でも深部で進行しているDTI(deep tissue injury)などもあり、重症度判断は難しいことから、Eメールで患部の写真を送ってもらうことでアドバイスしやすくなり、有用なツールとなっている。また、より多くの患者さんに対応するため、皮膚・排泄ケアの院内資格「スキンケアアドバイザー」を創設。これは5回の講義受講と4回の試験(ペーパーテストと実技)クリアにより取得可能な資格で、取得すれば認定証とともにバッジを進呈、院内の褥瘡や排泄管理は、このバッジを付けている職員に相談できる仕組みだ。

安食のみ看護部長は八鍬副主任の取り組みを高く評価、「将来的には地域全体で同様の資格を導入し、褥瘡対策を相談し合える関係性を構築できたらと思います」。

退院支援に力を入れる 多職種でカンファレンス

大垣徳洲会病院(岐阜県)は患者さんの退院支援に力を入れている。退院支援とは、退院後も患者さんが円滑に自宅や介護施設での療養を続けられるよう支援すること。国の医療政策のなかでも年々、その重要性が高まっている。同院では病棟看護師が主体となり、多職種が参加するカンファレンスや、独自に作成した「退院支援情報シート」を通じ、取り組みを推進。



適切な退院支援を行うため多職種によるカンファレンスを開催

退院支援では具体的に、入院前の生活や家族の状況をふまえ、退院後の自宅療養に必要な在宅サービスの利用を準備したり、自宅療養が困難な場合にはMSW(医療ソーシャルワーカー)と連携し、転院先や介護施設を探し

さんに接する機会が多い病棟看護師が適切と判断した。2013年4月に退院支援委員会(委員長は田原院長)を設立。同時に、退院支援情報シートを新たに導入した。同シートは、介護サービスの利用状況、介護者の状況、入院前・現在のADL(日常生活動作)

取得を目指したきっかけは60歳代の患者さん。自身で運転して来院したが、仙骨(尾てい骨の少し上の背骨)部の褥瘡を患い骨がほぼ消失しているほどの重症で、それ以外にも4カ所の褥瘡があった。来院後わずか2日後に敗血症で亡くなった。

入院前の生活や家族の状況をふまえ、退院後の自宅療養に必要な在宅サービスの利用を準備したり、自宅療養が困難な場合にはMSW(医療ソーシャルワーカー)と連携し、転院先や介護施設を探し

同院では病棟看護師が主体となり多職種との連携の下、退院支援に取り組んでいる。患者さんの状態を把握したうえで、早期に退院支援を開始するには、日々の看護業務を通じて入院時から患者

同院では病棟看護師が主体となり多職種との連携の下、退院支援に取り組んでいる。患者さんの状態を把握したうえで、早期に退院支援を開始するには、日々の看護業務を通じて入院時から患者

また、多職種が参加し患者さんのケア方針全般を話し合うために開いているケースカンファレンス(事例検討会)のなかでも、個々の患者さんの退院支援を検討課題に位置付け、話し合うように改めた。

同カンファレンスは、病棟看護師、リハビリテーションスタッフ、MSW、訪問看護師といった職種が参加し、毎週2回開催している。(2面に続く)